

環境リスク・コミュニケーションに活かされる ソーシャル・キャピタル

大江 瑞絵

Written by Mizue Ohe

リスクとは—環境リスクとは

近年、リスクという言葉は、さまざまな意味で使われている。リスク研究の分野で用いられるリスク概念は、「望ましくない結果が生じる確率」と「その結果の大きさ」とで捉えられ、確率論に基づいた定量的指標である。一方、一般市民の間でより広義解釈されたリスク概念とは、「危険性」「恐ろしさ」「未知なるもの」といった定性的概念である。環境リスクという言葉についても、前者では、化学物質の人体や生態系への暴露影響を前述の定量的指標で表し、後者では、物量で表すこともあるが、環境への影響を定性的に評価していることが多い。

合意形成手段として期待される環境リスク・コミュニケーション

リスク・アセスメントとリスク・マネジメントでは、前述の定量的指標によってリスク評価を行い、リスクを回避したり、削減したり、比較によってよりリスクの低い代替案を選択するといったリスク管理を行う。しかし、今日取り上げられる環境問題は、定量化が難しい。また、さまざまな側面で、行政や企業のみならず、一般市民が環境問題にどう対応するかという判断に直面している。

そこで、関係主体間の相互的交流の場(手法)として注目されているのが、リスク・コミュニケーションである。リスク・コミュニケーションは、情報交換によって、関係主体間での合意形成のための情報の質、量が同じレベルになることを目的としている。つまり、誰かを説得するという一方的な情報供給ではなく、欲しい情報を得ることも可能な相互の情報交流を意味する。さらに、得られた情報から合意形成を行う過程も含めて、リスク・コミュニケーションと呼ぶこともある。ある地域社会で、ある環境問題を望ましくない事柄、つまり、広義の環境リスクと認識するとき、関係主体が集まって情報交流を行い、事実の探究、事実の整理、原因の究明、対応策の提言による社会的合意形成を行う。その過程は、広い意味で、環境リスク・コミュニケーションと呼ばれる。

社会的合意形成にソーシャル・キャピタルはどう活かされるのか

ある地域の社会的合意形成過程で、環境リスク・コミュニケーションが行われているとき、そこに参加する関係主体の情報やネットワークがソーシャル・キャピタルであることに注目したい。

メキシコのユカタン半島では、他の多くの国や地域が経験しているように、観光化や都市化、生活スタイルの変化によって、ゴミ問題が深刻化している。メキシコでは地方行政がゴミの回収を行う。回収後に処分場で、ビン、金属類、ペットボトルなどに分別する市町村が多い。ある村では、自発的なゴミの分別を始めた。分別を始めるにあたり、この村でも環境リスク・コミュニケーションが行われた。村での自発的なゴミ分別は、村で共有される歴史、文化、価値観、社会構造を背景として得られた村の合意であり、ソーシャル・キャピタルが活かされた一例として今後も見守りたい。



CEL
村の青年グループによって分別されたペットボトル

大江 瑞絵(おおえ・みずえ)

関西学院大学総合政策学部助教授。1971年生まれ。筑波大学大学院社会学研究科単位取得退学。2000年より関西学院大学総合政策学部専任講師。メキシコ・ユカタン半島でのゴミ分別プロジェクトなどのフィールドワークを通じて、環境問題を対象とした地域における意志決定とリスク・コミュニケーションを研究している。専門分野は環境問題を対象としたリスク・コミュニケーション、意志決定構造分析。著書は、『持続可能社会構築のためのフロンティア 環境経営と企業の社会的責任(CSR)』(共著、関西学院大学出版会)。